

『若き日の大作曲家～大作曲家の出世作：ドビュッシー』

伊藤美由紀

クロード・ドビュッシーは、1862年8月22日、フランスのサン＝ジェルマン＝アン＝レに生まれる。両親ともに芸術とは無縁で、身分の低い階級で貧しい生活をしてきた。彼の父は、先祖の名前がド・ビュッシーとして2語の単語で記述されることを、高貴な身分に属することとして自慢げに使うことがあったのであるが、当時よくあったはやりの綴りでもあった。

ドビュッシー自身、幼年時代について語ることはほとんどなかった。経済的にも貧窮な生活環境であったために、長男であったドビュッシーは、初等教育さえまともに終了することができなかった。一般教養の欠落により、若い頃は、綴りの間違いなどが多く指摘されたが、後ほど文筆家の友人と交流をしたり、読書をすることで、知識を身につける。幼年時代には、全く芸術的な音楽を聴く機会もなかったのであるが、フランス人の子供が誰でも知っている子守唄や、遊び歌の旋律に愛着をもち続け、いくつかのものは、後に、自分の作品のなかに取り入れたりしている。幼年時の音楽以外の関心事として、色彩の鮮やかな蝶の収集や、部屋を小さな美しい装飾品や絵画などで飾ったりすることを好んだ。画家になりたかったとも言われている。幼年時代から美しい色彩に自然にひかれていった嗜好は、後の音楽家としての彼の色彩的な音色の幅に影響している。また、その頃、カンヌに住んでいた親戚を度々訪れており、海のある景観、薔薇の咲き誇るアンティープの街道について、後年に回想している。幼年時代の生活の中で、既に繊細な感性を発揮していたのであろう。9歳のときに、カンヌで初めてのピアノレッスンを受け、楽器の虜になった。その後、ヴェルレーヌの義兄でオペレッタ作曲家のド・シヴリーのピアニストの母、モテ・ド・フルールヴィル夫人から、レッスンを受けることになる。彼女は、彼の才能を認め、親身になって無償で教え込んだ。その成果として、数ヶ月でパリ音楽院を受験し、入学の許可を得たのである。1872年、ドビュッシー10歳であった。音楽環境の中で育ったわけではなく、偶然の音楽との出会いで、音楽家としての素質を認められ、音楽家への道へと自然に導かれていった奇異な出発であった。息子が船乗りになることを望んでいた両親も、ピアニストとしての成功を夢見るようになった。

その後、ローマ大賞第1等賞を得るまでの12年間、パリ音楽院に在籍するこ

とになる。入学当初は、ピアニストとしての技量を伸ばしていき、素質を認められ、数々の賞を受賞する。彼の好んだ作曲家達は、生涯の賞賛の的であったバッハ、弦楽四重奏をピアノのためによく編曲をしたモーツァルト、モテ夫人からそのスタイルの影響を受けたショパンたちであった。音楽理論についての知識は全くもっていなかったものの、ソルフェージュのクラスでは聴音、初見、和声の目覚ましい進歩を成し遂げ、担当のラヴィニャック氏からも音楽的感性を認められていた。しかしながら、パリ音楽院では、保守的な体制になじめず、音楽理論や保守的な規則に反抗し、あくまでも自分の耳に従順であろうとつとめた。その後、ピアノ伴奏科、ソルフェージュ科などで受賞をしたものの、数字付きバスの和声づけでは、独創的な経過音を散りばめ、単調な和声進行を型破る方法をとった。しかし、禁則とされている平行5度、8度の連続を和声課題のなかで故意に使用し、和声のクラスは結局、失敗に終わる。それらがきっかけとなり、創造的制作を極める作曲の道へと導かれていく。

彼の20代の作品は、ピアノ作品と声楽作品が中心となる。学資を稼ぐ為にチャイコフスキーの保護者として名高いメック夫人のピアノ伴奏者となり、ヨーロッパ各国に演奏旅行に出かけたり、モロー＝サンティ夫人の歌唱塾の伴奏者をつとめアマチュアのソプラノ歌手であるヴェニエ夫人に出会った経験は、作曲家としての成長に大きな影響を与えた。声楽作品は、晩年まで生涯にわたって重要なジャンルであった。《ヴェニエ歌曲集》を含み、夫人のために数多くの作品を作曲している。フランス語の響き、アクセントなどの特性を生かした柔軟で流動的な旋律線を、フランス語のテキストの言葉の深い意味を理解しつつ、音楽性を大切にしながら創造している。2～3分の各々の歌曲の小品のなかでは、ドビュッシー特有の旋律や、和声的な感性が、散りばめられている。ローマ滞在から帰国後書かれた《ボードレールの五篇の詩》は、ボードレールの『悪の華』のなかの5篇による歌曲集である。ボードレールの美学に影響され、綿密なテキストの理解のうえに、響きを選んで内面の表現を試みている。全音音階、半音音階を使いこなし、不明瞭な調性でもって、微妙な音色の変化、繊細な響きで独自の音楽語法を探求している美しい作品である。

音楽との出会いがピアノであったドビュッシーにとって、ピアノは音楽表現において特別な思い入れのある楽器であったに違いない。ピアノ伴奏による歌曲の作品制作から作曲のキャリアを積み、ピアノソロの作品を書き始めたのは、26歳以降の《2つのアラベスク》となる。ドイツ・ロマン派和声からの離脱、

伝統的な機能和声の否定により、新たな響きの色彩を求めた。ペダルの使用に細心の注意を払い、最後の倍音が消えるまで残響に耳をかたむけ、自分の耳で聴いて判断するということを常に大切にしていた。また、初期の作品から、音が段々とゆっくり消えるように終わるという構成を好んでいる。

20代までの経験を踏まえて、30歳の時に着手し始めた管弦楽曲《牧神の午後への前奏曲》は、不朽の傑作となった出世作である。マラルメの『牧神の午後』を自由に絵解きしたものであると本人が言及しているように、詩の言葉を超越して音として結晶化された。和声法、管弦楽法ともにドビュッシー独自の語法で音楽を構成し、「現代音楽は、この曲とともに目覚めた。」とブーレーズに賞賛されている。